

ハザマ 須田 清隆
 ジオスケープ ○山口 賢二
 ジオスケープ 大谷 理子
 ジオスケープ 佐藤利恵子

1. 研究目的

阪神大震災によって被害を受けた規模・形態・用途などの異なる多種多様な公園空間を調査し、被害状況を評価した。今研究の目的は、景観材料の形態・機能や、公園空間の平常時と非常時の機能の違いなどを検証し、防災に配慮した都市公園の景観整備のあり方を確認する。

2. 研究内容

この研究では、芦屋市にある21箇所の都市公園を調査対象とし、景観材料を構造材料・植物材料・修景材料を3つに分類して被害状況調査を行った。

被害状況を同一の基準で評価するため、<1・被害見られず、2・軽微(20%以上)、3・半壊(50%以上)、4・全壊(80%以上)>の4段階に分類した。

距離情報としては海岸線を起点(0 km)とし、公園までの距離によって順番に並べる。

被害状況と距離情報を軸にグラフ化することで、各景観材料ごとの被害状況の分布が確認できる。

その結果をもとに、地形的特徴と、地盤の特徴を加味して、考察を行う。

図-1は、震災発生後の公園の利用状況で、被災時に都市公園に求められる機能は、避難場所、救援拠点、置き場(車・生活ゴミ・瓦礫等)、居住場所、等であると確認された。これらの機能と、公園本来の機能の両立を考える。

図-1 公園種類別の利用状況

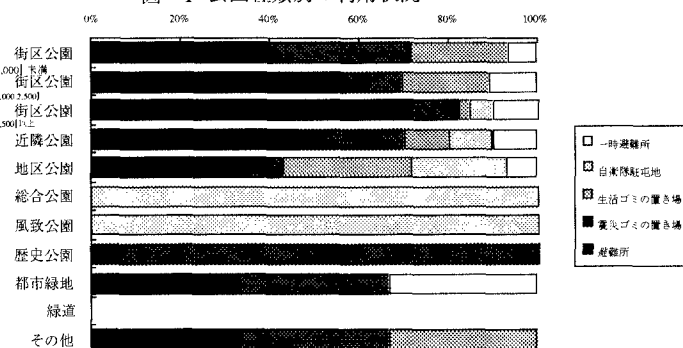
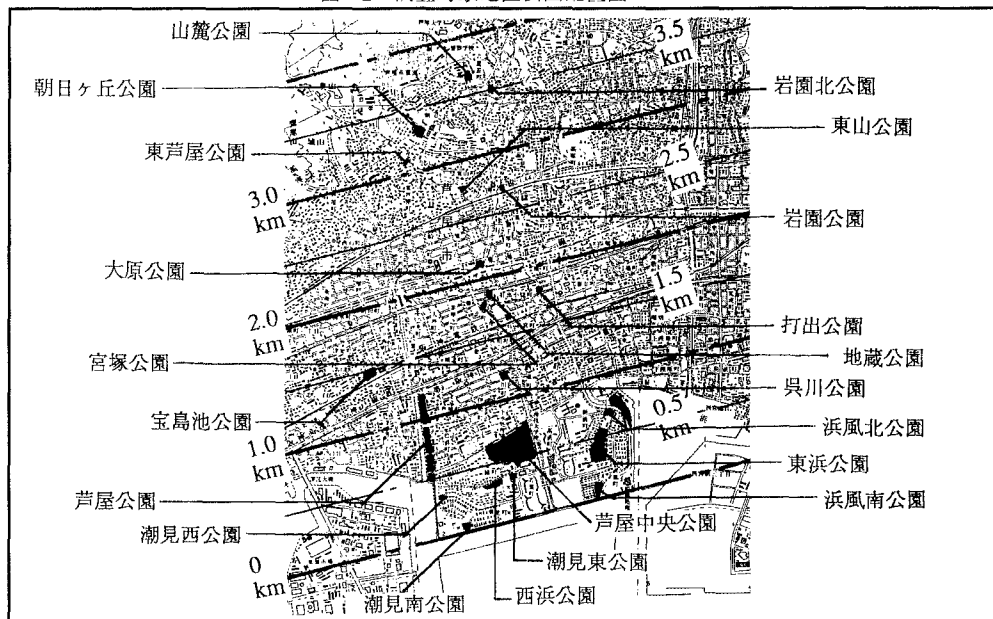
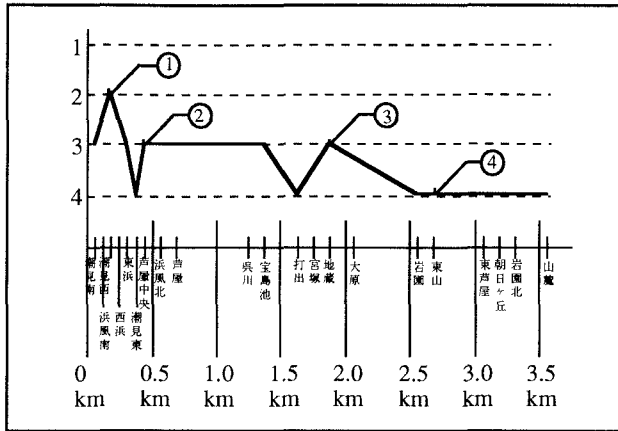


図-2 調査対象地区公園配置図



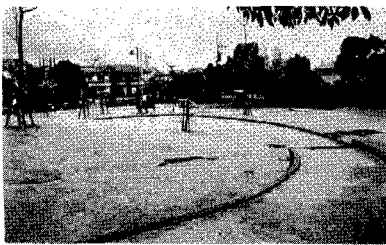
3. 調査結果

図-3 舗装の被害状況について



舗装の被害状況において、埋立地の特性として、液状化、地盤沈下など数多く見られ、舗装（アスファルト・インターロッキング・石貼り）の被害が多数確認できた。

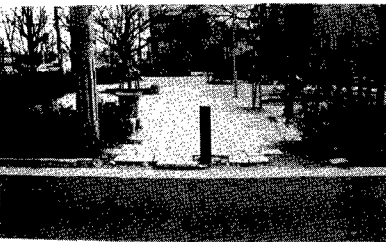
海岸線から離れ、山に向かうにつれて、被害の程度が軽くなる傾向にある。



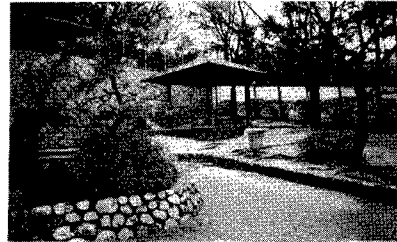
① 潮見西公園



② 芦屋中央公園



③ 地藏公園



④ 東山公園

4. 考察

景観材料において、被害の多かった景観材料は、＜外構、建屋、親水施設（噴水・池等）＞であり、被害の少なかった景観材料は、＜植栽、遊具、照明施設、休憩施設（ベンチ・東屋等）、モニュメント、サイン施設＞であった。この結果から、アスファルトやインターロッキングなどの舗装材料を使用した場合、災害時の機能としてゴミ置場としては使用できても、避難所としては適さない。

避難場所や、居住場所としての利用を考えるなら、土のグラウンドや芝生の広場が適している。また、被害が数多く見受けられた親水施設を作る場合、噴水や池のような施設には、防火水槽などの貯水能力のある施設を組み合わせるなどの工夫が必要であると考えられる。

参考文献：建設省都市局都市計画課 田中 隆 『震災復旧時における公園緑地の機能と今後の研究の課題』